

第2章 飯田市におけるESD地域創生拠点形成

I 飯田市遠山地区における学校を拠点としたESDの推進

小玉 敏也

1. プロジェクトの背景

2017年度から、連携協定を締結した飯田市において遠山郷プロジェクトを推進することになった。飯田市遠山地区は、市街地から東に60kmに位置する南アルプスの懐深くにある人口約1,700人（2019年度）の中山間地域である。2005年に、下伊那郡南信濃村と同郡上村が飯田市に編入合併となったが、2つの地区は旧くから遠山郷と呼ばれてきた。遠山郷は、全国の中山間地区と同様に、人口減少が続き学校統廃合の問題が浮上していた。

このような状況の中で、ESD研究所と飯田市は、①過疎化・少子高齢化が進む中山間地域における学校を核とした地域づくり、②小規模校におけるESD/SDGs教育を中心とした特色あるカリキュラムづくり、③地域自治区における学校・公民館・自治振興センターの協働モデルづくり、④ESDの視点から多様な形で進められてきた地域創生の成果と戦略の共有、を行っていくことで合意した。

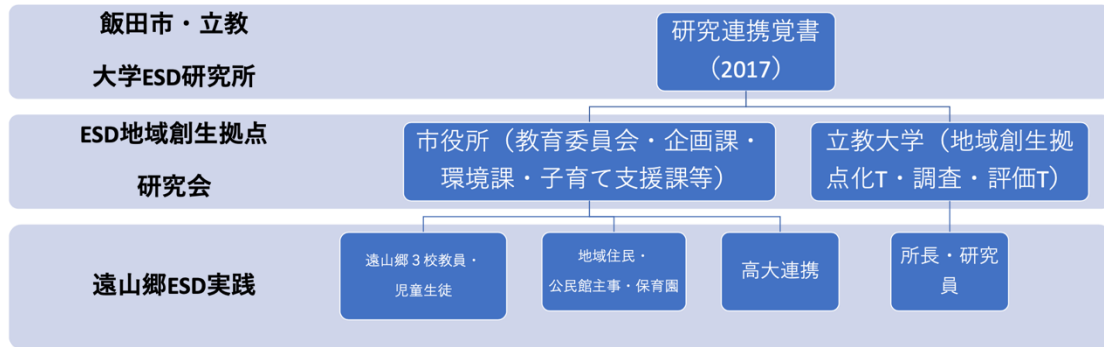
2. 協働プロジェクトの目的

本プロジェクトは、下記①～④の目的を合意した。

- ① 遠山郷3校の教育活動の伝統と特質を継承し、地域に根ざしたESDを推進する。
- ② 飯田市の学校での環境教育・ESDの充実に寄与する。
- ③ 社会教育職員の専門性を高め、客観的に評価できる方法の開発と実践に協力する。
- ④ 小中一貫校及びコミュニティ・スクールの充実に協力する。

上記の目的を達成するために、「ESD地域創生拠点研究会」を立ち上げて、本プロジェクトの企画・調整、運営、評価を行うこととした。同研究会は、ESD研究所、市役所担当課（企画課・環境課等）、教育委員会（学校教育課・公民館）、遠山三校学校長で構成する横断的な組織である。（図1）

図1 遠山郷ESDの協働プラットフォーム



3. 小中学校との協働

1) 3年間の取り組みの概要

小中学校との協働は、小玉が中心となって、小中学校の教育活動、教員研修に関与してきた。しかし、随時、阿部所長、朝岡研究員の支援を得てプロジェクトを進めてきた。以下、3年間の取り組みの概要を記載する。○が小中学校との会議や活動等への参加を意味する。

【2017年度】

1/22・23 阿部所長

飯田市役所での市長・教育長・各担当課との協議

8/4 阿部所長・朝岡研究員

市長・教育長表敬訪問、担当課との協定締結のための協議

8/21 飯田市担当課長、ESD研究所での協議

上村小の魅力化事業への支援を合意

○10/1・2 朝岡・小玉

市教委・追手門小・上村小・遠山中へのヒアリング

○11/28・29 小玉

市教委・上村小・和田小との協議

12/14 飯田市と研究所の研究連携覚書締結

1/19・20 朝岡・小玉

学輪IIDA参加・企画課との協議

○2/16 阿部所長・朝岡・小玉

『遠山郷の教育の可能性を考える学習会』講師

……地域住民、教職員、公民館関係者、教育長、市教委関係者の約50名参加

@遠山中学校

2/17 ESD地域創生拠点研究会@南信濃自治振興センター

【2018年度】

5/18/19 阿部所長・朝岡研究員

・飯田市役所

○8/9 小玉

・上村公民館、上村小学校、和田小学校、遠山中学校訪問

○9/29 朝岡研究員、東京農工大学生

・遠山中学校清流祭参加、ポスター展示

○10/5 小玉

・遠山3校ESD部会講師 和田小学校

11/16 阿部所長、小玉・増田研究員

・清里ミーティング2018にて研究発表「ESDによる地域創生の可能性」

○12/27/28 小玉

・遠山三校教員、市教委指導主事との懇談

1/26/27 阿部所長、朝岡・小玉

学輪IIDAにおける研究発表「遠山郷における学校を拠点としたESD/SDGs教育の推進」

○3/19/20 小玉

上村小学校校長、飯田市教委指導主事との懇談

【2019年度】

4/1 平山真美氏：地域おこし協力隊決定

・ジオパーク・エコパーク、環境・エネルギー事業、ESD担当

○7/4/5 小玉

・遠山3校教員研修会講師

○8/10～12 「自磨の時間：ESD塾」の開催

・学生14名、小中学生80名前後の参加。

・阿部所長、朝岡・小玉・増田研究員

8/18～19 小玉

・日本ESD学会研究発表「遠山郷における学校と地域が協働したESDの推進」
宮城教育大学

8/23～25 阿部所長、朝岡・小玉・増田研究員

・日本環境教育学会研究発表「ESDをベースとした中山間地における持続可

能な地域づくり(1)(2)(3)」山梨県立甲陽高等学校

○9/13～15 朝岡研究員

遠山郷スタディ・ツアー

- ・飯田市内高校生と大学生の遠山郷の共同調査

○9/27～28 朝岡・小玉

- ・市役所環境課訪問、遠山中学校清流祭への参加

○10/11 僻地教育全国大会発表 上村小学校

- ・SDGs目標に基づくICT教育の推進
- ・小玉、代表学生4名の見学

11/16 阿部所長 飯田市役所

- ・「ユネスコエコパークを生かしたESDによる地域創生」講演

○1/10 小玉

- ・南信濃公民館主事、遠山中学校校長、上村小学校校長との会議。地域団体「1500人委員会」への参加

1/11～12 阿部所長・小玉

- ・学輪IIDA参加。阿部所長講演

○2020/3/7 遠山郷未来フォーラム（予定）

- ・小玉、代表学生6名の参加

2) 協働の成果

①2018年度

- ・上村小の小規模特認校制度の実施により計2名の転入学児童がある。全校児童9名を維持する。
- ・遠山郷3校、ユネスコスクール加盟申請、9年間の小中連携を図る総合的な学習の時間の指導計画案を作成する。
- ・遠山3校の教員研究組織でESD部会が成立、3校を巡回するESD担当教員を任命する。
- ・南信濃公民館主催『未来フォーラム』を実施する。遠山中1年生と地域住民が「10年後の遠山」を語る。
- ・和田小の保護者が「和田宿にぎやかし隊」を結成。春・夏・秋に、街道縁日と子ども対象の学習会を実施する。
- ・南信濃公民館、活動方針にESD推進を明記する。和田宿にぎやかし隊設立趣意書にユネスコスクール登録支援を明記する。
- ・飯田市、遠山郷に地域おこし協力隊を募集（エコパーク・ジオパーク活用、ESD支援、

環境・エネルギー学習支援) し、2019年から1名が就任する。

- ・清里ミーティング2018(日本環境教育フォーラム主催)で、阿部所長・小玉・増田研究員が、遠山郷での取り組みを発表する。

②2019年度

- ・研究所と公民館の協働により、遠山地区在住の小中学生を対象にESD塾を開催した。89名が参加し、学校及び地域住民から高評価を得た。
- ・遠山郷での協働的なESD実践を、2つの学会で発表し、社会に発信できた。
- ・飯田市街地から上村小学校に新入生が3名入学し、小規模特任校制度の効果が一定程度現れた。
- ・上村小学校が、学校運営の柱にSDGs目標の達成を掲げ、それを踏まえたICT教育の研究を僻地教育全国大会で発表し、参加した約100名の教育関係者から高い評価を得た。2020年度は、総合的な学習の時間を中心としたESDを推進していく教育課程を編成している。
- ・遠山中学校が取り組んできた「郷土の舞」が第50回博報賞の「日本文化・ふるさと共創教育部門」を受賞した。同中学校は、学校教育目標に「郷土敬愛」を掲げて、ESDの観点から教職員・保護者・地域が一体となって教育に取り組んできたことが評価された。
- ・2年間を通して、教育委員会の教育指導主事による遠山3校への支援が着実に行われていた。これは、筆者との複数回にわたる細かな打ち合わせが功を奏した点もあるが、遠山郷でESDを推進するという教育委員会の明確な方針があったためである。

(こだま・としや 立教大学ESD研究所客員研究員／麻布大学生命・環境科学部教授)

II 幼児教育の取り組み 5年間の概要

増田 直広

飯田市での幼児教育への関わりは2017年度に始まった。以下に概要を記載する。

1) 視察および意見交換

(1) 遠山郷の概況視察

2018年8月4日、飯田市企画課の林課長補佐の案内で遠山郷の主要スポット（下栗の里、旧木沢小学校、上村小学校など）を視察した。

＜林課長補佐より＞

- ・飯田市は飯田市街地でも遠山郷でも公民館が地域の拠点となっている
- ・遠山郷には、山や川などの自然、下栗の里からの風景、歴史、文化などの資源が豊かである
- ・地域内の学校や保育園は、年々児童・生徒数、園児数が減っており、大きな課題となっている

＜所感等＞

- ・中山間地域ならではの自然や文化、歴史などの資源が魅力的
- ・各種資源を活かして地域創生を進めていくのに、環境教育が貢献できる

(2) 千代保育園の視察と意見交換 その1

2018年11月26日、飯田市企画課の林課長補佐と共に千代保育園を訪問し、澤田園長に園の概況と自然保育への取り組みを聞いた。

＜千代保育園より＞

- ・保育園が廃園となる危機があったが、住民の出資で民間の保育園となった
- ・近隣のよこね田んぼに散歩や作業に出かけることがある
- ・地域の食材を使った食プログラムも行う

＜所感等＞

- ・園設立（民営化）自体が地域創生につながっている
- ・上記設立の背景もあるからか、地域との関係は良好な様子
- ・既に地域資源を活かした取り組みを行っている

(3) 飯田市保育園関係者との懇談

2018年11月26日、飯田市役所で飯田市子育て支援課の鈴木氏、千代しゃくなげ会の小澤理事長、千代保育園の澤田園長、飯田市企画課の林課長補佐と飯田市における自然保育の取り組みについて意見交換した。

＜飯田市より＞

- ・いいだ型自然保育があるため、公立の園では自然保育に取り組んでいる
- ・ただし、一過性の対応となっている感もある
- ・自然保育の効果についてのエビデンスが欲しい

＜所感等＞

- ・いいだ型自然保育の取り組みがあるものの、現場では戸惑いもある様子

- ・各園の資源を活かした保育を市内で共有することで、自然保育への敷居が低くなる
- ・取り組みをしながら、外への発信もしていけると良い

(4) 遠山郷の概況視察

2018年11月27日、遠山郷の主要スポット（遠山郷土館和田城、まつり伝承館「天伯」など）を視察した。

<所感等>

- ・改めて、遠山郷には文化や歴史に関する資源が多いことを実感した
- ・文化や歴史資源を活かした保育の様子を知りたい

(5) 南信濃公民館との意見交換

2019年3月12日、飯田市企画課の林課長補佐と共に南信濃公民館を訪問し、宮田主事に幼児関連の取り組みを聞くと共に意見交換を行った。

<南信濃公民館より>

- ・乳幼児学級など公民館と保育園の連携事業を行っている
- ・飯田型コミュニティスクールにおいて公民館が大きな役割を果たしていることを聞いた

<所感等>

- ・想像以上に公民館と保育園が連携していた
- ・飯田型コミュニティスクールといいだ型自然保育の連携ができると良い

(6) 上村保育園の視察と意見交換 その1

2019年3月12日、飯田市企画課の林課長補佐と共に上村保育園を訪問し、上沼園長に園の概況と自然保育への取り組みを聞いた。

<上村保育園より>

- ・現在、園児数は6人で2019年度には4人になる
- ・地域との連携は良好で、2018年の夏に園の裏山を開拓して遊び場を作った
- ・上村小学校との連携もある
- ・地域の自然を活かした保育を行っており、通信を通して保護者等に発信している
- ・霜月祭りの前には神社の清掃を行うなど文化面のつながりもある

<所感等>

- ・現時点で魅力的な保育をしている
- ・地域資源のリスト化をすることで改めて地域資源を知ることができると伝えた
- ・保育園と地域資源をつなぐ役割として公民館が機能している

(7) 上村保育園の視察と意見交換 その2

2019年7月22日、飯田市企画課の小島主事と共に上村保育園を訪問し、熊谷園長と意見交換を行った。

<上村保育園より>

- ・熊谷園長は2019年4月に着任したが、園児の五感の敏感さに驚いている
- ・全園児4人という小規模園の悩みとして、関われる園児数の少なさがある。その意味で和田保育園との合同保育の機会はあるがたい
- ・運動会は地域を巻き込んで行っている、住民にとっても楽しみとなっている様子
- ・食（お茶、ソバなど）や文化（霜月まつりごっこ）を活かした活動も行っている

<所感等>

- ・裏山の活用方法を模索している様子
- ・園児の人間関係を広げるためにも、和田保育園や上村小学校との交流は有益
- ・上村保育園の自然保育を支えているのは地域とのつながりの強さ

(8) 上村保育園の視察と意見交換 その3

2019年11月5日、上村地区の地域おこし協力隊員の平山氏と共に上村保育園を訪問し、視察を行った。また、平山氏と情報交換をした。

<活動の様子>

- ・午前、裏山での日常保育に同行、保育者も入り自然遊びをして過ごしていた
- ・午後は地域協力者が園を訪れ、園児と共にソバの脱穀作業を行った
- ・いずれも園児は楽しそうに過ごしていた

<所感等>

- ・裏山での遊びでは保育者が自然への気づきを促し、人間関係の少なさをカバーしていた
- ・住民の協力を得て裏山に焚き火場を作る構想がある、やはり地域との関わりが強い
- ・住民との協働で裏山を遊び場・学び場にできるのではないだろうか

(9) 和田保育園の視察と意見交換

2019年7月22日、飯田市企画課の小島主事と共に和田保育園を訪問し、高梨園長と意見交換を行った。

<和田保育園より>

- ・5年後に園児がいなくなる予測への危機感がある
- ・小学校とのつながりがある、お茶摘み、タケノコ採りなど

- ・散歩時、地域の年配者からの声かけが多い
- ・大雨時に園から避難することがあったが、自然保育の効果か園児は冷静に対応できた
- ・保育者に自然や自然保育に関心を持ってもらうことが必要

<所感等>

- ・上村保育園同様に自然好きの園児が多い
- ・災害時対応のエピソードは自然保育の意義と言える
- ・飯田市の環境教育関係者とのつながりが無いとのことなので、サポートできると良い

(10) 千代保育園の視察と意見交換 その2

2019年11月5日、千代保育園を視察し、澤田園長はじめ保育者共に裏山を視察し意見交換を行った。

<千代保育園より>

- ・裏山が法人の持ち物とのことなので、自然保育の場として手を入れたい
- ・同時に園庭も自然保育の視点で改良していきたい
- ・保育者研修と園児対象のプログラムを希望している

<所感等>

- ・保育の視点だけでなく、生物多様性や生態系の視点で作業をできると良い
- ・作業をする前に保育者が自然調査をすることも、自然を知る意味では効果的
- ・園児や保護者を巻き込んで作業できると、愛着のある園庭や裏山になる
- ・フィールドづくり、保育者研修、園児向けプログラムを連動させてモデルを作りたい

2) 園児対象のプログラム実践

2019年11月6日、和田保育園の散歩（園近くの河原までの行程）に同行し、園児9名へのプログラムを指導した。飯田市企画課の林課長補佐が同行した。身近な自然物の観察や自然遊びを行った。

<指導内容>

- ・園児が見つけた生き物等の解説（カマキリ、クモの巣など）
- ・自然遊びの紹介（ネコジャラシレース、宝石（きれいな石）探しなど）
- ・アリジゴクの観察

<所感等>

- ・事前の話の通り、自然好きの園児が多かった。自然に触れることへの抵抗がない
- ・身近な河原や移動途中の土手で遊べる環境は自然保育に適している
- ・保育者からは園児だけでなく保育者にとっても気づきの時間だったと評価いただい

た

- ・また別の機会に訪問し、自然保育の手伝いをできると良い
- ・当日の様子を園の通信に掲載していただいた

3) 保育者研修

2019年11月5日、和田保育園の保育者4名を対象に研修を行った。飯田市企画課の林課長補佐と上村地区の地域おこし協力隊員の平山氏が同席した。野外でのプログラム体験と室内での座学を行った。

<指導内容>

- ・野外でのプログラム体験（草笛、葉っぱじゃんけん）
- ・室内での座学（幼児環境教育、山梨県北杜市での実践事例）
- ・幼児環境教育のための参考図書紹介

<所感等>

- ・幼児環境教育の意義や遠山郷における自然保育の魅力を伝えることができた
- ・日常保育後のため長時間は難しいが、このような機会を増やせると良い
- ・今後は和田保育園と上村保育園の合同研修会にできると、学びが深まる

（ますだ・なおひろ 立教大学ESD研究所客員研究員／財団法人キープ協会主席研究員）

Ⅲ 飯田市遠山地区における社会教育による地域創生拠点の形成

小玉 敏也

1. 「自磨の時間：遠山郷 ESD 塾」

1) 概要

ESD地域創生連携協定に基づき、2019年8月10日～12日まで、長野県飯田市の南信濃学習交流センターにおいて「自磨の時間：遠山郷ESD塾」を開催した。これは、首都圏（麻布大学・東京農工大学・立教大学）と長野県（松本大学）の大学生14名が、遠山郷の小中学生を対象に、自然体験活動と学習支援を行う夏季休業中限定の塾である。本事業は、南信濃公

民館が主催し、そこに阿部研究室（立教）、朝岡研究室（東京農工）、小玉研究室（麻布）、田開研究室（松本）、増田（公益財団法人キープ協会）が協力する形をとり、担当の公民館主事と大学教員が中心となって準備と運営に携わった。また、地域の個人・団体等の直接・間接の支援があったことは言うまでもない。

「自磨の時間」という名称は、廃校となった上村中学校の総合的な学習の時間の名称を受け継いでいる。「ESD塾」は、4研究室の教員の共有する研究課題であったことに由来している。3日間の日程は、下記の通りである。

(1) 8月10日の活動

時 間	活 動 内 容
10:00～10:30	・開校式
10:45～12:30	・自己紹介 ・自磨の時間～参加者の自習と学習支援。低学年、中学年、高学年、中高生の4グループに分かれて活動する。
12:30～13:30	・昼 食
13:30～15:15	・自磨の時間～参加者の自習と学習支援
15:45～17:30	・料理実習～南信濃地域支援センターにおいて、地域の人と郷土料理を作って食べる。
17:30～	・地域主催の交流会～公民館関係者、学校関係者、大学生、大学教員が、地域の人たちと歓談の機会をもつ。

午前中は、大学生が主体となって、アイスブレイクと子ども達の自習への支援を行った。自習課題は、各自が持参した教科や学校の宿題を中心に行った。低学年は集中できる時間が短いので、図書の読み聞かせやレクリエーションを行った。午後は自習の後に場所を移して郷土料理の実習を行い、地域で伝承される手巻き寿司や煮物を共同で作った。（写真1）



写真 1

(2) 8月11日の活動

10:00～10:10	・朝の会
10:15～12:00	・自磨の時間～参加者の自習と学習支援。前日と同様。

- 12:00～13:00** ・ 昼 食
- 13:00～16:00** ・ 自然体験活動～（財）キープ協会職員の指導のもと、上村地区の河川で、水棲生物の観察、川遊びを行う。
- 16:00～16:30** ・ 片付けと着替え
- 16:30～17:00** ・ 振り返りの時間～上村公民館で、自然体験活動のふりかえりを共有する。

午前中は、前日同様に自習を行った。午後は、上村地区の川に移動して、大学関係者の指導と大学生の支援のもとで、ライフジャケットを着用して川遊びを行った（写真2）。入る前に、水棲生物に関する簡単なレクチャーと安全指導を行った。本格的な川遊びは初めての子どもがほとんどで、ずぶ濡れになりながらよい表情で活動ができた。振り返りでは、多くの子どもから好意的な意見が出された。



写真 2

(3) 8月12日の活動

- 10:00～10:10** ・ 朝の会
- 10:15～12:00** ・ 自磨の時間～参加者の自習と学習支援。前日と同様。
- 12:00～13:00** ・ 昼 食
- 13:00～14:00** ・ 自磨の時間～参加者の自習と学習支援。
- 14:00～15:00** ・ お別れの会、閉校式（写真3）
- 15:30～** ・ 解散

活動の内容は、自磨の時間が中心で前日と変わらない。この日は、地域の人がかき氷を作ってくれたり、お菓子を差し入れて下さったり、心温まる支援をいただいた。3日間通しで通った子ども達には、公民館から修了証を手渡した。大学生からは、手書きのメッセージを贈った。閉校式には、地元の学校関係者（校長・教頭）、公民館長、自治会長、PTA会



写真 3

長も同席し、子ども達の様子を見守ってくださった。

3日間で参加した子どもの延べ人数は、**70名弱**である。

2) 遠山郷 ESD 塾の成果と課題

2019年10月11日、上村公民館において、主催した公民館主事2名、麻布大学教員1名、各大学の代表学生7名で反省会を持った。そこで総括された成果と課題は、以下の通りである。

(1) 成果

- ・子どもの評価が非常に高かった。小学生は、大学生とふれ合う機会自体が貴重で、心の通う交流ができた。中高生は、何気ない会話から進学や進路の参考になった。
- ・上村地区と南信濃地区の子どもが交流できた。普段は、生活圏の違いからなかなか交流する機会がないが、学校とは違う場で共に学ぶ場があった。
- ・参加人数が多かった。お盆の時期に1回につき**30名弱**の子が参加することは貴重である。

(2) 課題

- ・**ESD**という考え方を、塾の運営の中に十分に反映できなかった。4大学での事前調整を十分にすべきだった。
- ・自磨の時間の子どもへの関わり方が難しかった。いろいろな個性の子に対応しなければならないこと、子どもの集中力が持続できないこと、全体の目的が定まっていなかったこと等が挙げられる。
- ・異なる年齢の子ども同士の交流の時間が持てなかった。

以上の反省を踏まえて、**2020年度**も開催することが決まった。

(こだま・としや 立教大学ESD研究所客員研究員／麻布大生命・環境科学部教授)

2. 「学輪 IIDA」 遠山郷スタディ・ツアー

朝岡 幸彦

1) 学輪 IIDA 共通カリキュラムと遠山郷

飯田市上村地区・南信濃地区（いわゆる遠山郷）におけるESDの実践として、高校生と大学生とが合宿型のフィールドスタディを通してともに学ぶ取り組みを「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」と呼んでいる。

この実践は、学輪 IIDA（がくりんいいだ）という飯田市が主催する大学間ネットワークの事業として取り組まれている（<http://gakurin-iida.jpn.org>）。私立短期大学1校のみが立地する飯田市にとって、高校を卒業する若者たちのほとんど（8割）が市外に進学・就職して故郷に戻らない（4割しか帰ってこない）という構造は、どうしても乗り越えなければならない課題であった。もともとユニークなまちづくりを進めていたこの市（まち）には、多くの大学の研究者や学生が教育・研究の場として訪問していたことを逆手に取り、その窓口となる「大学連携係」を設置するとともに、52 大学 113 名（2019 年度）の研究者を組織する大学間ネットワークを組織した（朝岡・澤田「大学－自治体間連携の現状と可能性－学輪 IIDA を事例として」、学輪 IIDA 機関誌『学輪』第 3 号、2016 年）。全国の大学や研究者との連携組織をつくることで、積極的に研究者や大学生を誘致するとともに、自治体施策や産業振興のシンクタンク機能を強化することが期待されている。だが、もっとも期待されているのは、市外に流出する高卒者の還流であり、進学・就職等で市外に転出する若者が全国の大学の研究者や大学生が訪問する動きや研究成果に刺激されて、再び市（まち）に戻ることであると見ることができる。

ある意味で、その鍵を握る事業が高大連携事業であろう。学輪 IIDA には年 1 回の全体会の他に、二つのプロジェクト会議が作られている。そのうちの一つが「共通カリキュラム構築プロジェクト会議」であり、飯田の価値を集約し、共有化した「モデルカリキュラム」を毎年策定し、フィールドスタディを通じて実践し、会議で検証を積み重ねてきた。もともとこの市（まち）を訪問する大学生たちに向けた共通カリキュラム（「南信州・飯田フィールドスタディ（3泊4日の大学生向け学習プログラム）」を基礎に）を構築することで、地域の人材や資源とうまくマッチングする方法を模索してきた。こうした取り組みの中から、高校生と大学生とがともに学ぶ高大連携事業が提案され実施されるようになった。2019 年度は「ソーシャルキャピタルフィールドスタディ」（5 大学 30 名、5 高校 22 名）とともに、「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ（遠山郷 EG-FS）」（2 大学 11 名、3 高校 14 名）が高大連携事業として取り組まれた。

遠山郷 EG-FS は、かねてから飯田市上村地区・南信濃地区（遠山郷）で社会調査実習（授

業)を実施してきた東京農工大学と地域との関係を基礎に、松本大学、京都外国語大学(2018年度)、立教大学(ESD 研究所)が飯田市内の高校教師とともに高校生・大学生向けの地域調査学習のプログラムを作成しようとしたことに始まる。

2) 遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディの特徴

遠山郷は日本最大の大断層である中央構造線の直上に位置するため、その特徴的な地形・地質が「南アルプス(中央構造線エリア)ジオパーク」に認定されているばかりでなく、3,000メートル級の高い山脈と深い峡谷に育まれた豊かな自然が「南アルプスユネスコエコパーク」にも認定されている。このエコパークとジオパークという二つの貴重な自然遺産をもとに、そこに暮らす人びとの生活や歴史・文化の調査を通して、地元の高校生と大学生の「学習の場」として深い学びを実現しようとするものが、「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ(遠山郷 EG-FS)」の実践である。(表1)

第1回遠山郷 EG-FS は、2018年度に「遠山郷エコ・ジオパーク Field Study 2018」(2018年9月15日～17日)として取り組まれ、東京農工大学(大学院)、松本大学、京都外国語大学の3大学の教員3名、学生11名と、飯田 OIDE 長姫高校、飯田女子高校の教員2名、生徒8名に、飯田市企画課、環境政策課、上村地区・南信濃地区の2公民館の協力で実施された。このプログラムの特徴は、エコパーク・ジオパークに関する専門家や地元の猟師の講義を踏まえて、生徒・学生たちが「災害を辿る」「霜月まつり」「遠山の生業」「秋葉街道」の4つのグループに分かれてフィールドワーク(巡検)を行ない、ワークショップで作成したポスターを上村地区・南信濃地区の地元関係者の前で発表したことにある。

前年の成果と反省を踏まえて、市役所と大学、高校の教員が丁寧な準備とすり合わせと高校生・大学生による事前学習を行いながら、第2回遠山郷 EG-FS「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」(2019年9月14日～16日)が、東京農工大学、松本大学、立教大学 ESD 研究所の3大学の教員3名、学生11名と、飯田風越高校、飯田 OIDE 長姫高校、下伊那農業高校、飯田女子高校の4高校の教員3名、生徒13名に、飯田市企画課、環境政策課、上村地区・南信濃地区の2公民館の協力で実施された。

このプログラムの特徴は、「前年度の様子・高校生事前学習の共有」を専門家の講義の前に置いたことであり、ワークショップを立教大学 ESD 研究所の客員研究員に依頼したことである。その上で、①観光、②和田、③下栗、④上町の4つのグループに分かれて「ツーリズム」に関わるフィールドスタディに取り組んだ。①観光グループは観光協会、地域おこし協力隊員が開設したゲストハウス、地元の若者たちが改築したシェアハウスの見学と聞き取りを行い、②和田グループは地元猟師とともに山に入って、鹿の解体と調理を体験した。③下栗グループは飯田市内で重要な位置を占める地域行事である「地域運動会」に参加し、手伝うなかで聞き取りを行ない、④上町グループは地域活性化委員会の取り組みの聞き取

り調査を行った。

この遠山郷 EG-FS を実施するにあたって、市役所と大学、高校による丁寧な議論と地元（遠山郷）の関係者との調整や準備が繰り返されたことは重要である。まだまだ工夫や改善の余地はあるものの、過疎化・高齢化する地域の中で地元の高校生と大学生たちが地域の財産を発掘し、記録しようとする実践が、地域づくりに果たす効果は少なくない。第3回遠山郷 EG-FS が、2020年9月19日～21日に再び実施される予定である。

3) 高大連携事業の意義と可能性

高大連携による「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」が果たした教育上の効果の一端を、プログラムに参加した高校生の感想に見ることができる。

高校生と大学生とが一緒にフィールドスタディに参加し、同じ班でワークショップやポスター作成をしたことが素直に共感と驚きとして表現されている。

「私たちとは全然違った感想や書き方で新しい発見があった。…お風呂に入っている間を考えてくれていた時や、質問を積極的にしてくれた時があった。私もこんな人たちになっていきたい」

「班の皆が全く知らない人だったけど、高校生も大学生も話かけてくれてうれしかったし、…大学生の人たちは考え方が私よりも一歩二歩先のことを考えていて、すごいなって思っ
て勉強になりました」

「高校生の考えと違った大学生の考えは、『こういう考え方もあるのか』と思うものが多くあった。悩んでいるときにアドバイスをくれたりしたので、すごく頼りになった」

また、遠山郷という地域を歩き、地元の人たちと関わる中で高校生たちの意識の変化も見ることができる。

「本当に本当に楽しい3日間で、恵まれすぎていました。すでに余韻がすごいです。遠山への関心ももっともっと沸いたので、これからは遠山のことについて調べていくつもりです」

「スケジュールが忙しいなという印象だが、だからこそこれだけ内容の濃いフィールドスタディなんだと思った。とても楽しい3日間をすごせて幸せだった」

「水という1つの観点に集中することで水についての歴史や「現状を知ることができて面白いと思った。今回は大勢の友達で行ったのですごく面白くて、でも話を聞くところは真剣に聞けてメリハリもつけることができた」

ESD の主体は、市民である。ただし、その市民は「未来の市民」であることを求められている。持続可能な開発目標（SDGs）に象徴される地球レベルの課題は、いまずぐに地域でも取り組まなければならない課題であり、高校生や大学生に代表される若者こそが「未来の市民」として、ESD の主体として期待されていることは明らかである。学校教育としての中等教育（中学・高校）と高等教育の間には、大きな壁がある。その壁は、主に教科書

と学習指導要領などに見られる決められた知識・技能の枠内で学ぶ教育と、学問・研究の自由を基礎にその枠を超えることを求められる教育との違いであろう。高校生たちは大学生とともに地域という教科書にはない「場」で学ぶことで、この壁を軽々と越えることができるのである。大学生にとっても、高校生とともに「未知の地」について学ぶことは、自らの学び方を問い返す良い機会となっていると思われる。これからも、ESD の主体としての高校生・大学生のフィールドスタディに大きな可能性を期待したい。

表 1

学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 日程表

	時間帯			テーマ	講 師	会場	備考
	開始	終了	分				
1 日目 9月14日 土曜日	10:00	11:00	60	集合～遠山郷へ移動		飯田市役所	高校・農工大はマイクロ利用
	11:00	11:30	30	受付		南信濃公民館	松本大学は直接現地集合
	11:30	12:00	30	○ 自己紹介、趣旨説明、オリエンテーション		南信濃公民館	
	12:00	13:00	60	昼食		南信濃公民館	お弁当あり
	13:00	14:20	80	1 フィールドワーク 「和田の街」	ジオパークガイド 3名	南信濃(和田)	3グループに分かれて行動
	14:30	16:00	90	2 ①昨年度の様子・高校生事前学習の共有 ②遠山郷とエコパーク・ジオパーク	参加高校生・大学生代表 飯田市美術館 寄託員 研究員 坂本 正夫氏 松本大学総合経営学部 田 関 寛太郎 専任講師	南信濃公民館	
	16:00	17:00	60	3 翌日のフィールドワークに向けての事前学習	松本大学総合経営学部 田 関 寛太郎 専任講師	南信濃公民館	
	17:00	17:15	15	移動(鳥畑マイクロ) *宿泊場所:鳥畑			
	17:30	18:30	60	夕食			
	18:30	20:00	90	4 山の生活、猟師の仕事	地元猟師 益山勝人さん 木坂玄登さん	鳥畑	
2 日目 9月15日 日曜日	20:00	21:00	60	5 フィールドワーク事前準備	松本大学総合経営学部 田 関 寛太郎 専任講師	鳥畑	*終了後、お風呂は22時まで
	8:45	9:00	15	※朝食は7:30～ 移動(鳥畑マイクロ)			
	9:00	10:00	60	6 ワークショップ ※前日の振り返り、フィールドワーク準備	キープ協会 増田 直広 先生	南信濃公民館	
				移動(グループ毎に車利用)			
	10:00	17:00	420	7 フィールドワーク ※昼食はテーマ毎にとる	グループ①観光 遠山郷観光協会 菅原慎一さん 太田 幸 水戸幸恵さん コンパスハウス 遠山典宏さん	遠山郷全体 (和田を中心に)	コンパスハウス遠山さんアテンド 10:00～11:00 観光協会で菅原さんのお話 南信濃公民館で弁当 13:00～14:00 太田家で水戸さんのお話 *17時までに鳥畑へ戻る
	10:00	17:00	420		グループ②和田 地元猟師 益山勝人さん 木坂玄登さん	和田	終日:猟師の仕事を感じる体験 産の解体 昼食カレー作り 猟師の山へ入る *17時までに鳥畑へ戻る
	10:00	17:00	420		グループ③下栗 下栗里の会 野牧武さん	下栗	10:15～12:45 運動会参加(お弁当昼食、聞き取り調査含む) 13:00～17:00 下栗へ移動・調査 *17時までに鳥畑へ戻る
	10:00	17:00	420		グループ④上町 上町活性化委員会 前島衛さん 山崎紀男さん	上町	10:00～12:00 上町調査 12:00～13:00 上町公民館で昼食 13:00～17:00 引き継ぎ調査 *17時までに鳥畑へ戻る
	17:00	19:00	120	夕食・お風呂 *宿泊場所:鳥畑			風呂を済ませてから夕食 *夕食18:00～
	19:00	22:30	210	8 ワークショップ ※発表会の準備		鳥畑	
3 日目 9月16日 月曜日	8:45	9:00	30	※朝食は7:30～ 移動(鳥畑マイクロ)			
	9:00	11:30	150	9 ワークショップ ※振り返り、まとめ、発表 ※発表はポスター発表とする。 発表会10時30分～		南信濃公民館	
	11:30	12:00	30	10 総括・閉会		南信濃公民館	
	12:00	13:15	75	飯田市役所へ移動～解散			高校・農工大はマイクロ利用 ※松本大学は現地解散

(あさおか・ゆきひこ 東京農工大学教授/立教大学 ESD 研究所客員研究員)